

問い6 私は神さまも仏さまも信じていますが、それではいけないのですか。

連研中央講師・高岡教区
林 史樹

「連研」で「神と仏」がテーマとなる時、ともすれば法座の内容が、「神（神道）よりも仏（仏教）のほうが優れている」、「神を信じるのは仏教徒・真宗門徒として間違っている」という展開や結論になりがちです。「地域の氏神を否定するのか！」、「神棚を降ろせというのか！」という反発もそこから生まれます。まず前提として確認しておきたいのは、氏神や神社を否定すること、神棚を降ろすことがこの法座の目的ではないということです。「神と仏」の存在そのものを問うのではなく、「神と仏」に向き合う「私」を問うことがこの法座のねらいなのです。

私たちの国には自分の宗教を選べない時代がありました。江戸幕府は徹底した宗教統制を行い、キリスト教を全面的に禁止し、すべての民衆を仏教寺院（檀那寺）の檀家となることを義務づける「寺檀制度（寺請制度）」をつくりました。さらに、幕府から寺院に戸籍権、教育権が与えられ、寺院は保護を受けることによって幕藩体制下に組み込まれ、封建身分制度を維持・補完する役割を担っていきます。教団内にも身分差別制度ができあがり、門徒は家の宗教を継ぐことが当たり前となり、僧侶は門徒が固定化したため、熱心に布教する必要性が低くなり、伝道によって平等の社会を実現していくという本来の念仏集団の機能を失っていきます。明治に入って政府は神社の氏子となることを義務づける氏子調べを開始しますが、寺檀制度が氏子制度に置き替えられただけで、強制的宗教政策という意味では内実は同じものでした。寺檀制度と氏子制度は廃止されましたが、現在も実態として生き続けています。氏子であることも真宗門徒であることも自分で選んだわけではなく、所属させられてきた、とも言えるのではないのでしょうか。「神さまも仏さまも信じる」という姿勢もそのような歴史の中で引き継がれてきたのかもしれない。「今の門徒とお寺との関係は、義理としがらみとうわべだけのおつきあいです」と、ある門徒推進員は言いました。僧侶にとっては厳しい言葉ですが、現在の寺院と門徒の関係を見事に言い当てています。形式的な儀礼のみでつながってきた形骸化した寺院・僧侶と門徒の関係をとらえ直すことから始めなくてはなりません。

さて、私が何かを「信じている」というとき、それは、何をどのように信じているのでしょうか。信じることによって何を求めるのでしょうか。以前、わが子に「父さんはあなたを信じているからね」と言ったら、「それは信じていないってこと

だね」と返され、何も言えなくなることがあります。人は本当に信じて（信頼して）いるものに対して「信じています」とは言わないのです。不安や疑いの気持ちを持ち「信じています」という言葉で打ち消そうとするのです。

また、サブテーマに「お念仏をとなえると何かよいことがありますか」という問いが挙げられていますが、私にとって「よいこと」とは何でしょうか。「神頼み」という言葉があります（「仏頼み」と読み換えることもできます）。私の人生には自分の力ではどうしてもできないことがあります。生・老・病・死の苦の現実が、まさにその根本でありましょう。そこで神仏に祈願して、「無病息災」「交通安全」「商売繁盛」「合格祈願」などと自分の願いの実現を請い求めるのです。それは祈願という行為によって神仏と取引をし、見返りを期待する姿とも言えます。私の願いはどこまでいっても自分中心であり、自分の都合を満たそうとする欲なのかもしれません。その欲を満たすために神仏を利用し、いいときは「おかげさま」と喜び、悪いときには「神も仏もあるものか」と嘆きながら、あてにならない利益（すくい）を求めて私たちは生きているのかもしれません。人間は不安を抱えた弱い存在だと自覚することは大切ですが、自分の弱さをごまかし、正当化してはいけないとも思うのです。

「神さまも仏さまも信じている。両方を大切にしている」という気持ちは決して否定されるものではありません。ただし、そこでは何をどう大切にしているのかが問われます。両方を信じることはどちらも大切にしているようで、実はどちらも大切にしていないのではないかと考えてみることも重要です。「私は神さまも仏さまも信じていますが、それではいけないのですか」という問いは、私自身の「神と仏」への向き合い方を見つめなおし、浄土真宗を「家」の宗教から「私の宗教」として選びなおし、であいなおすきっかけとなるでしょう。「おつきあい」の宗教から脱却し、教えを「よりどころ」として生きる門徒、僧侶になっていくための問いでもあります。私はこれまで何を大切にしてきたのか。これから何を大切に生きていくのか。阿弥陀仏の浄土の真実を私の生活の中心に据えて生きるとはいかなることなのかを一緒に考えてみましょう。

問い6 私は神さまも仏さまも信じていますが、それではいけないのですか。

連研中央講師・備後教区
苺屋 光影

み教えからの気づき

み教えやみ教えをよろこぶ仲間にてあうとき、新たな人生が開かれてきます。「連研」がなければ考えることもなかった、疑問にも思わなかった、当たり前前にしていた自分自身に問いが生まれ、新たな気づきをいただきます。今回のテーマ（問い6）「私は神さまも仏さまも信じていますが、それではいけないのですか。」には「神」の問題が取りあげられています。なぜ「12の問い」の中に「神」の問題があるのでしょうか。「神とは何か」、「浄土真宗では神をどう考えるのか」など学ぶべき課題はありますが、この問い6において、まず初めに大切な視点は当たり前となっていることに対し「それではいけないのですか？」と自分自身に問いかけることです。「連研」に参加された皆さんにはそれぞれの地域の環境や状況の違いがあります。生活の中に神棚とお仏壇が一緒に安置してあること、神社やお寺の両方にお参りをすること、また神社やお寺の両方のお世話をしていることなど、何も疑問に思うことなく当たり前になってはいないでしょうか。また、そのことに触れなくても触れることなく、伝えたい思いを語れない僧侶の立場のもどかしさもあると思います。門信徒も僧侶もその思いを語り合うことから始めてみてはどうでしょうか。「それではいけないのですか？」と問われていることに対して「それでもいいではないか」と開き直す私がいます。「しかたないのでは」と流している私がいます。また「神は拝まない」、「神社へは参らない」、「お祈りはしない」という答えを先に押し付けてしまう自分にも気をつけなくてはなりません。大切なことは、なぜ神を拝まないのか、なぜ神社へお参りしないのか、なぜ祈らないのか、という問いに向き合うことであり、そのことがなければ、み教えと私の生活が別々なものになってしまいます。この法座は直接的に神棚をおろすことを目的にしているものではありません。しかしこのままで良いと認めるものでもありません。お互いの現状を責めるのではなく、当たり前としてきた自分に問いかけながら、素直に思いを語り合いましょう。

「浄土」の次に「神」の問題を考える

「連研」は「12の問い」に起承転結があり、全体を通して問い、聞き、語る場となっています。「連研」は回を重ねていく中で信頼関係が生まれ、これまで言えなかったことが自然と話せるように心が開かれてきます。問い5

「お浄土とは何ですか」では、人生のよりどころが示されます。その次に「神」の問題があるのは、仏さまと対照させて神さまの問題を扱うのではなく、確かなよりどころをいただいたわれわれが表面的、慣習的なおつきあいの宗教からいかに解放され、主体的に私の歩む道を選んでいくことができるのか、あらためて自らを問うていただきたいからです。

昔からのしきたり？

神棚とお仏壇の両方がある生活が当たり前として、地域のお祭りなど関わってきた方も多いと思います。これらは地域の共同体の中に組み込まれ「昔からやってきたから」「みんなやっているから」と慣習的に根拠のないものに依存し、自ら考えることなく、それに反する者を排除し、村八分というような言い方で疎外してきました。この束縛の歴史は、意図的に作られた国の宗教政策である寺檀制度や氏子制度に見ることができます。この制度によって複雑な形で社会的にも精神的にも支配されてきました。江戸時代には徳川幕府がキリシタン等を禁止し、身分制度を維持するために寺檀制度が成立します。明治時代より国家神道の宗教政策により氏子制度が生まれてきます。お寺は寺檀制度の支配構造の中で民衆の戸籍管理の役割を果たしてきただけでなく、積極的に為政者の支配に協力してきました。私たちは過去の歴史を正しく学び、決して過ちを繰り返さないようにしなくてははいけません。また無関心にならないように寺檀制度の問題点を学び、一人ひとりがみ教えをよりどころとしてつながっていく新たなお寺と門信徒との関係を築いていくことが求められています。

「おつきあい」から「よりどころ」へ

話し合いの中で「そう言われるけれども・・・」という声を聞きます。地域でのおつきあいは大切であり、仲間はずれになることは怖いので、問題を起こさないように大勢の方へ身を置こうと考えます。また神も仏も同じように上手につきあえば良いのではないかという考え方もあるでしょう。しかしみ教えにであい、自分の姿に気づかされていく中でごまかしている自分自身の自己中心性、排他性、差別性があきらかになってきます。そこで「お寺やみ教えもおつきあいになってはいないだろうか」、「排除されたくないために排除する側にまわっていないだろうか」、「仲間作りをしながら、仲間はずれを作っていないだろうか」と問い直していくことが大切です。私もその悲しい現実を作りだしているひとりであったことを反省し、仲間はずれのない仲間作りをめざしてともに歩いていきましょう。